

にはならなかったそうである。それで祖母は次に一人で魚を売り歩いた。肩に背負って一里も二里も歩くのはかなりの重労働だったのではなからうか。殊に冬は大変だった。それでも耶蘇^{イエス}の魚屋^{イサナ}さんと言って待つて居てくれるお得意さんがふえたという。これが次男が成長して(長男は明治二十四年若くして死亡)職につき生活が安定するまで続いた。明治三十五年次男(教次郎)の許に嫁いで来た母(みん)は米沢出身で実家は一人の僧侶を出した程の仏事にはげむ家庭だったが京極家に入ると間もなく導かれてクリスチャンとなり、生まれた子供達にも次々と幼児洗礼を授けた。

このような家庭に明治四十三年に私は生まれた。母の胎内にある時から私は教会に出入りしていたのである。赤ん坊の時母の膝に抱かれ或は背中におぶわれて教会に通い。姉の手に引かれて日曜学校へと通った。日曜学校は私には楽しかった。純な幼い心に解り易い言葉で説かれる聖書の言葉は心に沁みこむように入ってくる。宗教的影響は大きかった。牧師は佐藤義郎先生、小川永水^{ながわ ながみづ}先生の時代だった。私には宗教は極自然のものだった。空気のように水のように。神さまはいつも身近に感じられた。小さい頃我家の床の間には聖画が掛軸にして掛けてあった。(イエス様がかがんでお弟子の足を洗って居られる画)壁には羊の群の中に子羊を抱いて立つて居られる画が額におさまり、長い柱掛けには「神は愛なり」の聖句が父の手で筆で大きく書かれてあったのを今も思い出す。朝は揃って讃美歌を歌い父の祈で一日がはじまった。日常の父の生活からも多大の感化を受けた。多くは話さなかったが父のすべてが神による行動であつたことを子供心に感じ取ることが出来た。

こうしていつの間にか神は心の奥深く刻みこまれてしまったと思う。

それから今までの長い年月、失意悲しみの時、悩み苦しむ時も、神がいつも共に在して下さつたことは、どれ程救いであり、慰めであり、励ましであつたことか——愛そのものであり大なるお恵みであつたと、今私は深い感謝をもって過去をふりかえつて見る。幼い時育つた信仰がそのまま今日に至つたような幼稚な私の信仰であると今にして省みるが、やはり自分なりにそれを大切に、キリスト教徒としてこれからの一生を終わりたいと願っている。神はわがいのち、わが力である。これまで上山教会に関わつたすべての方々へ限りない信愛と感謝をこめてこの稿終わる。

ナザレから、なんの良きものが

牧 師 添 野 匠 二

彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによつて従順を学ばれた。(へブル人への手紙五・八)「私と上山教会の兄弟姉妹との出会いは、……」と考える時、いつも思い起こすのは、あの騒々しいわが家の子供たちを、受け入れてくださった時のことです。

現在、上山教会には牧師館がありませんので、日曜日には山形市にある自宅から、一家六人自動車で、上山教会に通っているのです。四人の子供達は教会学校が終わつてから、大人の礼拝の間は、礼拝堂の隣りにある控室で、静かにしていなければなりません。しかし、何分、子供のことですから騒々しくなつて、礼拝の妨げになりはしないかと、親としては、何時も不安を懷いているのです。

そんな時、「心配いりませんよ。気になりませんから。かえつて、うれしいんですから」と言つて兄弟姉妹達が、わが子達を、ゆるして、心から迎え入れて下さいました。

私には「嬉しい」としてしか捉えられなかつた子供達の声を、兄弟姉妹達は「嬉しい」と聞いて下さる。親の及ばない、深い愛で幼な子を愛して下さる。すばらしい人達だなあと、感心しました。しかし、このような言葉を語り得るためには、この方々が、今まで、どのような思いで歩まれたかを思う時、私は深い感動に襲われるのです。その言葉に嘘はない。この方々は、その群れに幼な子が加わつたことを本当に喜んでおられる。その喜びを知つたからです。

わが子達は、教会の子供として、受け入れられ、愛され、育てられているのです。幼な子が、幼な子らしく、あるがままに生かされる場所、それが上山教会です。今の時代には、残念ながら、このような場はごく稀なのではないでしょうか。上山教会は、小さな群れではありますが、主の生命に活かされた群れだと深く思うのです。

私は十年前、神学校を卒業する時、竹森満佐一学長に、任地希望を「東北地方」と提出しました。こういう希望は